

# ホエルの書

黒田  
白石

とあるクジラの腹の中  
雑然と色んなものが転がっている

客入れ  
照明、ゆっくりと暗転

## 1日目

ポップな音楽  
照明、うっすらと全体を照らす  
黒田、椅子の様な物に座っている  
白石、床に寝ている

音楽、フェイドアウト

黒田、自分の足の裏を押す  
白石、くすぐったそうにする

黒田  
：：  
ええ。

黒田、自分の脇をくすぐる  
白石、身悶える

黒田  
ええ。

白石、がばつと起きる

黒田  
うおっ

白石  
：：

黒田  
：：

白石  
教祖様。

黒田  
は。

白石  
教祖様。

黒田 教祖ではない。

白石 ∴

白石、黒田に向かって、祈るような行為

黒田 だから違うつて。

白石 ∴

白石、黒田に向かって、先程とは違う、祈るような行為

黒田 違うつて。

さつきとお祈りの仕方、変わってたけど。

白石 絶対教祖様だよ。

黒田 教祖ではない。

白石 教祖様だよ。

黒田 教祖ではない。

白石 教祖様

黒田 ではないつて。

白石 ∴

黒田 君が何を信仰しているのかは分からないけれども、違ってから何か信仰してるの。

白石 いえ。

黒田 だよな。

そんな感じするもの。

こんなこと、言いたくはないんだけど、∴見た目だよ。

おそらく、単に、僕の見た目。

自分で言うほど、屈辱的なものはないけど

白石 こことだよ。

黒田 聞けよ。

白石 ∴

黒田 君は何だ。何なんだ。

白石 ∴

俺は、犬か。

黒田 何でそう思った。

白石 いや、違う。

黒田 違うよ。

白石 俺は、∴小鳥か。

黒田 普通の鳥ではないんだ。

白石 いや、違う。

黒田 違うよ。

白石 俺は、…プラスチックか。  
黒田 ついに生き物じゃなくなっちゃった。  
白石 いや、プラッチック。  
黒田 関西人ってこと。  
白石 いや、違う。  
…  
俺は何だ。馬か。違う。鹿か。違う。  
黒田 馬鹿だと思っ。  
白石 蛙なのか。蛇なのか。タカなのか。キリンなのか。ハイエナなのか。  
俺は何だ。俺は何なんだ。  
教えてくれ。  
俺は何だ。  
黒田 人だよ。  
白石 …  
黒田 人でしょ。  
君は狂ってるの。  
すごい芝居的な盛り上がり方をしていたけど、全く意味が分からないよね。  
途中のプラスチックは絶対いらなかったと思っし、  
白石 こんどだよ。  
黒田 聞けよ。  
白石 …  
黒田 マジか。  
君マジか。  
もう一回言っよ。  
マジか。  
君マジか。  
白石 …  
黒田 …  
白石 もう一回言って。  
黒田 何で。  
もう良いよ。満足したよ。  
あのさ、何も進んでいないんだよ。  
進んでいないだけじゃなくて、進みそうにもないんだよ。  
どうだろう、もう少し、建設的に会話を組み立てていかないかな。  
白石 …はい。  
黒田 そうだね、それじゃあ、ます、  
白石 教祖様ですか。  
黒田 またそれ。  
白石 もやもやしてるんです。(髪をもやもや)  
黒田 馬鹿にしてるでしょ。

もやもやするなら、こっちだから。(胸を)  
白石 教祖様ですか。  
黒田 違います。  
白石 ∴  
黒田 違います。  
すつきりしましたか。  
白石 ∴はい。  
黒田 会話の主導権を、私に下さい。  
白石 ∴はい。

白石、舞台上の何かを拾い、黒田に渡す

白石 どうぞ。  
黒田 ありがとう。

黒田、白石から受け取ったものを、捨てる

黒田 こういうことをやめてくれって言ってるんだ。  
こういうことがあると、いちいち進まないんだよ。  
何だろ、そういう天才なのかな。  
そういう天才つて、組織に一人はいるよね。  
きつと、君がそうなんだろうね。

白石 こごごだよ。

黒田 聞けよ。  
いい加減聞けよ。  
もうそれ良いよ。  
いや違う、そうだよ。それ進めたいんだよ。  
それについて、喋っていきたくないんだよ。  
それに特化しよう。

白石 「それ」が多すぎて、何を言ってるか分からないです。

黒田 君のせいだよ。

白石 ∴俺のせい

白石、かなりのショックを受けて、ふらふらになる

黒田 良いから。  
やめて。  
大事じゃないところに反応するのやめて。  
君だけのせいじゃない。  
きつと僕も悪い。君が興味を惹かれるリードを口にしてるんだから。

でも、このまま何も進んでいかないってわけにはいかないと思うんだ。  
明らかにしていかなければいけないことがあると思うんだ。

白石　：はい。

黒田　何だろうね。

疲れたね。

白石　寝ましようか。

黒田　寝ないよ。

寝るわけにはいかない。

白石　はあ。

黒田　さつきから、何回か口にしてるけど、ここはここだと思う。

白石　そんなこと言ってます。

黒田　言ってたよ。

頼む。

本当に頼む。

白石　：：

黒田　ここはどこだと思う。

白石　：：

黒田　信じられないかもしれないけど、ここは、クジラの腹の中なんだ。

白石　：：

### 白石、できないタップダンス

白石　夢じゃない。

黒田　どうのことだろう。

白石　ここは、本当にクジラの腹の中なのか。

黒田　どうのことなんだろう。

白石　なんでだ。

黒田　ちよつと待つてくれないか。

白石　何ですか。

黒田　どうのことなんだろう。

白石　何がですか。

黒田　タップダンスって言えば良いのかな。

なんだったんだろう。

白石　「なんだったんだろう。」って言われても。

黒田　普通だったら、ほつぺをつねったりして、痛いとか、痛くないとかで、夢の中か夢じゃないってことを認識したりしないかな。

白石　こう見えても、俺、痛覚がないんですよ。

黒田　こう見えてもって、見た目じゃわからないけどね。

白石　昔、交通事故にあつた時に。

黒田　そうなんだ。

白石　でも、痛覚がないと言っても、傷つくことはありますけどね。

黒田　：

白石、タップダンスもどき、足を挫く

白石　痛っ。

黒田　べタだね。

何でそういう意味のないことを、君はぶっこんでくるんだろ。

そのタップダンスは何なんだ。何の象徴なんだ。

白石　俺、タップダンスには、一切興味がありません。

黒田　君と話していると、腹が立つてくるね。

白石　でも、もしこれが夢なら、きっと、華麗にタップダンスを踊れるはずなんです。

俺のタップダンスは、俺のイメージ通りのできなさでした。

だから、夢じゃない。現実なんだって。

黒田　…その論理、破綻してるよ。

白石　クジラの腹の中かぁ。

黒田　あまり驚いてるようには見えないね。

白石　驚いてますよ。

黒田　私には、冷静に見えるよ。

今までも、何人も人がここに来たけど、君ほどマイペースに喋った人は見た  
ことがない。

嫌味じゃなくてね。

白石　：

黒田　私が、ここがクジラの腹の中だと言った途端に、取り乱す人が、ほとんどだった。

冷静そうだから、このまま言わせてもらおうけど、

私の話を聞いて、受け入れられず、ここから逃げ出そうとして、逃げられた人はいないよ。  
全員死んでいたよ。

このクジラの腹の中で、私たちは、それほど不自由な思いをせず、生きていくことができ、  
しかし、ここから出ようと努力した瞬間、色々な不都合が襲ってくるんだ。

言ってること、分かるかな。

君は、冷静そうだから、きっと私の言ってることも理解できるんじゃないかなと思ってね。

白石　ここ、クジラの腹の中なんですか。

え、何で、何で、何で。

黒田　頭が悪いたけのようだね。

色々ついていつてなかったってことのようだね。

白石　どういことですか。

黒田　そのままだよ。

白石　あり得ないでしょ。

だって、おかしいじゃないですか。

俺、自分の部屋で寝てたし

え、仕事は、  
今何時ですか。仕事行かないと、今何時ですか。

黒田 必要ない。

白石 ::

黒田 そんなもの、ここでは必要ないんだ。

白石 ::

黒田 仕事も、時間も、ここでは必要ないんだ。  
必要がないというよりも、存在しないと言えはいいのかな。  
例え存在していたとしても、何の意味も持たない。

白石 今日の朝飯用に買っておいた、ポリユームたつぷり焼き肉弁当はどこいったんだ。

黒田 私、今、結構重要なことを言ってきたよ。

白石 え。

黒田 しかも、朝から結構なもの食べるんだね。

白石 あ、寝る前に食ったのか。

黒田 どうなってんの、君。

白石 ショックだろ。

どんな味だったか、全然覚えてない。

黒田 ::

白石 3時間も迷った拳句、決めた弁当ですよ。

黒田 迷いすぎじゃないかな。

白石 3時間、コンビニの弁当のコーナーの前に立って、あれでもない、これでもない、

黒田 さぞ迷惑だったろうね。

白石 ようやく、これにしようと思った瞬間に、次の時間帯の弁当が届いて、一気に、弁当の種  
類が増えたんですよ。

黒田 こつち見ても、コメントないよ。

白石 もう何が何だか分からなくなつて。

思わず絶叫してしまいました。

黒田 コンビニの店員さんは、何故通報しなかったんだらうね。

白石 誰か。

黒田 まさに、コンビニの店員さんが、そう叫びたかつただらうね。

白石 叫んだところで、何も解決なんかしない。

黒田 それは正しいよ。

白石 俺は、自分に問うてみました。

そもそも俺は、何を食べたくて、コンビニに来たんだ。

いや、別に俺は、何かを食べたかつたんじやない。

そうだ、ジャンプを立ち読みするためにコンビニに来たんだ。

黒田 見失いすぎじゃないかな。

白石 ジャンプをまだ読んでいないじゃないか。

俺は、弁当のコーナーから雑誌のコーナーに移動しました。

思わずエロ本を手にとり、

黒田 ジャンプは。  
白石 ついつい一時間ほど、軽く目を通し  
黒田 それは熟読だね。  
白石 そこからまた、弁当のコーナーに。  
黒田 ジャンプは。  
白石 エロ本を見た後は、何故か肉が食いたくなるものです。  
黒田 知らないけどね。  
白石 そうでしょ。  
黒田 え。  
白石 エロ本見たら、肉食いたくなるでしょ。  
黒田 何でいきなり、ぐいぐい来たの。  
白石 エロ本見たら、肉食いたくなるでしょ。  
黒田 いや、君。  
白石 分かりませんか、俺の気持ち。  
黒田 残念ながら。  
白石 何ですか、格好付けてるんですか。  
黒田 そういわけではない。  
白石 なるでしょ。  
なるはずです。  
女の裸を見た後は、絶対に肉が食いたくなるはずですよ。  
黒田 いや、私には。  
白石 そうでしょ。  
黒田 ちょっと待ってくれ。  
白石 そうでしょ。  
黒田 いや、君。  
白石 そうでしょ。  
黒田 ∴分からなくもない。  
白石 そう(でしょ)。  
黒田 いや、分かるよ。  
白石 ∴  
黒田 何なんだ、何でいきなり、そんなぐいぐい来たんだ。  
白石 俺は、ようやく自分の欲しかった弁当が何なのか、知ることができました。  
黒田 弁当が欲しかったわけじゃないよね。  
白石 4時間もコンビニにいれば、腹が減るでしょ。  
黒田 自業自得だから。  
白石 ポリエームたつぷり、焼き肉弁当です。  
黒田 格好よく言ったね。  
焼き肉弁当に辿り着いた理由を知った以上、何をしても、格好良くなることはないんだけどね。



白石 外に出たら、うっすらと明るくなっていました。

黒田 ジャンプは。

白石 もう遅い、この弁当は、明日の朝食にしよう。

黒田 ジャンプは。

白石 俺は、自分の部屋に戻り、布団に入りました。が、むらむらした気持ちが抑えられず、すぐに布団から出て、弁当を食いました。

黒田 そうか。

白石 色々納得できました。

黒田 私はさっぱりだよ。

白石 で、何の話でしたっけ。

黒田 何の話だったんだろうね。  
おそらく、まだ、ほとんど何も進んでいないと思うんだ。  
何の話をしたのか、ほとんど無意味な気がするよ。  
ちなみに、君は、ここがどこなのか、分かっているのかい。

白石 …どこですか。

黒田 だよな。  
君、ほとんど私の話聞いてなかっただろうしね。

白石 思い出しました。  
イワシの腹の中だ。

黒田 惜しいね。  
いつの間にか、私達は小さくなってしまったようだね。

白石 … (自分の身体を確かめる)

黒田 小さくなってないよ。

白石 …

黒田 クジラだよ。  
ここは、クジラの腹の中だよ。

白石 ク、クジラ。

黒田 まるで初めて聞いた単語のような驚きだね。  
さっき、確実に言ってたからね。

白石 ク、ク、クジラ。  
ここ、クジラの腹の中なんですか。

黒田 本当に新鮮な驚き方だね。

白石 何で。

黒田 何で。

白石 何で、俺は、クジラの腹の中にいるんですか。

黒田 呑み込まれたからだろうね。

白石 は。

黒田 そのままだよ。  
呑み込まれたからだろうね。

白石 …

黒田 信じられないのも無理はないかもしれない。  
でも事実だよ。

白石 冗談は、冗談は俺だけにしてください。

黒田 どういう意味。  
やつぱりさつきまでののは、ふざけていたのか。

白石 嘘でしょ。

黒田 呑み込まれない限り、ここに迎り着くのは無理だ。

白石 だって、俺、普通に部屋にいましたよ。  
部屋で寝てたんですよ。

黒田 クジラの食事は大量だからね。

白石 意味分からないですよ。  
俺が生活していたのは、陸地だし、クジラつて海の中で生活してるわけですよ。  
何で、部屋にいた俺がクジラに呑み込まれるんですか。

黒田 世の中には、意味のわからないことはたくさんあるでしょう。

白石 それにしても。

黒田 とにかく、君は、クジラに呑み込まれた。  
そして、ここにいるんだ。

白石 ∴  
教祖様も。

黒田 教祖ではない。

白石 ∴あなたも呑み込まれたんですか。

黒田 そうだね。

白石 いつ。

黒田 言っただろう。  
ここでは、時間というものが存在しないんだ。  
いつから、ここにいるのか、どれくらいの長さ、ここにいるのか。  
もはや覚えていないよ。

白石 ∴  
どうやったら、出られるんですか。

黒田 それも言っただろう。  
出られないよ。  
でも何も問題ない。  
ここにいれば、それほど不自由な思いをせず、生きていくことができる。

白石 それほど不自由な思いをせず。

黒田 それはそうだろう。  
世の中に、完全なものは存在しないんだから。  
自分の望みが多ければ多いほど、完全であることは難しい。  
だが、多くを望まなければ、それほど不自由な思いをしなくても、生きていける。

白石 ∴

白石、逃げる(退場)

黒田 気をつけなければいけないよ。  
ここから出ようとするれば、様々な不都合が、君に襲い掛かってくるんだから。  
死なないようにね。

暗転

2日目

ポップな音楽

照明、うつすらと全体を照らす

黒田、椅子の様な物に座っている

白石、床に寝ている。1日目に比べて、服がボロボロになっている

白石、がばつと起きる

黒田 うおっ

白石 ::

黒田 ::

白石 教祖様。

黒田 またやる。

昨日と同じこと、またやる。

信仰ないんでしょ。

白石 でも、

黒田 見た目だから。

君も髪が伸びれば、教祖だよ。

白石 ::

黒田 何その顔。

君も髪伸びるよ。

さも、自分は、髪が伸びませんみたいな顔したけど、髪は伸びるし、伸びたら、教祖になるよ。

白石 ::

黒田 伸びるよ。

太くて、固いのが伸びるよ。

白石 下ネタですか。

黒田 下ネタではないよ。

白石、動こうとして、身体のおちこちが痛いことに気付く

白石 痛つ。  
服も。  
：  
下ネタですか。  
黒田 違う聞き方があるでしょ。  
俺に何かしましたとか。  
白石 したんですか。  
黒田 してないよ。  
白石 じゃあ、何でこんな風になってるんですか。  
黒田 覚えてないのかい。  
白石 ：  
ジャンプを立ち読みしに、  
黒田 それじゃないね。  
白石 ：  
黒田 君、昨日、ここから逃げようとしたら。

クジラの食事の時間  
大きな揺れが起こる  
ぐらぐらと揺れる白石、飄々とゆれる黒田  
揺れがおさまる

白石 思い出した。  
黒田 そう、君は逃げ帰ってきたんだよ。  
言っただろう。  
ここから出ようとするば、様々な不都合が、君に襲い掛かってくるって。  
白石 ここから出て少ししたら、いまみたいな揺れがあつて、何か分からないけど、小さなもの  
が身体中に貼りついてきて  
黒田 オキアミだね。  
白石 足を抑えられ、  
黒田 イカだね。  
白石 ガツンと頭を殴られたような  
黒田 カツオだね。  
白石 それで俺は、  
黒田 そう、ふらふらになつて、またここに戻ってきた。  
もう少し先まで行っていたら、ここまで戻つてこれなかったかもしれない。  
白石 ：  
どうすることもできないんですかね。  
黒田 何が。  
白石 ここから出ることはできないんですか。  
黒田 わからないね。

白石 くそ。  
黒田 違ふよ。そうじゃなくて。  
私は、出たいと思わながら、どうかしようなんて思わないし、君の気持ちが分からない  
ということ言ってるんだ。  
白石 ∴  
黒田 私は、ここでの生活に満足しているし、もちろんそれは慣れからきていることもあるだろ  
うが、  
白石 少し、話して良いですか。  
黒田 ∴構わないよ。  
白石 言にくいんですけど、決して、邪魔しないでください。  
黒田 よく言ったね。  
マイペースにも程があるよ。  
白石 お願いします。  
黒田 構わないよ。  
白石 絶対に、絶対に邪魔しないでください。  
黒田 分かったよ。  
白石 ∴

#### 白石の一人芝居的な感じ

白石 男 大将、マグロのヤマかけと、焼き目子と、ウナギのクリーム煮をもう一つ。  
後、ハブ酒おかわり。  
君は。  
女 ∴  
男 ハブ酒で良い。  
女 ハブ酒は、もう大丈夫。  
普通のお酒、頼んでも良い。  
男 ∴良いよ。  
女 私、何かさっぱりした物を。  
男 ∴

#### 酒等が届く

男 ありがとう。

#### 飲んだり、食べたり

くそ。  
美味いね〜  
女 ねえ。

男 君も食いなよ。  
女 うん。  
男 美味いよ。  
女 ねえ。  
男 何。  
女 こんなこと、ミシエランの昼付きのお店で言うことじゃないと思うんだけど  
男 何？  
女 …あなたと別れたいの。  
男 え。  
女 ごめんね。  
男 ちょっと待つて。今何で。  
女 …あなたと、別れたいの。  
男 …どうしてかな。  
女 ごめんなさい。  
男 ちょっと待つて。  
謝つてほしいんじゃないで、  
…どうしてかな。  
俺は今、少しパニックに陥ってる。  
こんな言い方は、自惚れてるだけかもしれないけど  
俺には、君が別れを切り出した理由が全く分からないんだ。  
…どうしてかな。  
女 …  
男 理由を教えて欲しい。  
女 …

男、酒を飲み干す

男 大将、ハブ酒、もう一杯。  
教えてくれないかな。  
女 こんなところで言う話じゃないと思うの。  
男 じゃあ、どこでなら話してくれるのかな。  
別れたいってことは、俺の部屋に来る気はないんだろう。  
女 そうね。  
できることなら、このままお別れしたいと思ってる。  
男 それは勘弁してくれ。  
俺の気持ちを少しは理解してくれないか。  
このまま、何も分からないまま別れるなんて、酷すぎると思っただ。  
女 …  
男 恥ずかしい話だけど、俺には、何の予感もなかった。  
女 私はずっと思ってた。

男 後、更に恥ずかしい話だけど、俺は君に別れを切り出されても、結局別れることにはならないと思ってる。

女 私の決意は固いわ。

男 俺は、別れたくない。

女 私は決めたの。

男 だったら、せめて理由を教えてくれないか。

女 ……こんなところで話すことじゃないと思うの。

男 構わない。

    どんな理由だろうと、聞かない方が後悔すると思う。

女 ……あなたの変態的なセックスについていけないの。

男 え。

女 あなたの變態的なセックスについていけないの。

    私は、變態的なセックスが嫌いな。

男 ……

男、酒を飲み干す

男 大将、ハブ酒、もう一杯。

    こんなところで、そんな大きな声で言わなくても。

    みんなが、俺のことを見てるよ。

店員 お待たせいたしました。

    マグロのヤマかけと、焼き白子と、ウナギのクリーム煮です。

男 何てタイミングの悪い店員だ。

女 だから言わない方が良いつて言っただじやない。

男、キョロキョロと周囲を気にする

男 いや、ある意味、これはこれで良いかも。

    やっぱり、君は、最高だと思う。

    俺と君はあつてると思うよ。

女 やめて。

    私は、もつと普通で良いの。

男 ちよつと待ってくれよ。

    俺は、自分のセックスを變態的だつて思ったことないよ。

女 自覚した方が良いと思う。

男 ……俺のセックスは、變態的かい。

女 ええ。

男 知らなかった。

女 あなたは、セックスが好き過ぎるのよ。

男 ……

女 さよなら。

男 俺は、セックスが、好き過ぎるのか。  
分からない。

男、飲んだり、食ったり

男 大将、焼き白子もう一つと、ハブ酒。

白石 ありがとうございます。

黒田 ぶっこんだね。

何でその話をしたいと思ったのか、そして、実際にしてしまったのか、ある程度君という人間を実感してるから、あえて何も言わなかったけど。

ぶっこんだね。

白石 ご清聴ありがとうございます。

黒田 全くだよ。

自分で自分を、お人好しだと思ふことは多々あるけど、今がまさにそうだね。

何で、私は君の言うまま、邪魔しないで聞いてたんだろうね。

5分位あつたよね。

君の芝居が上手かったのかな。

見入ってたのかな。

何か、とても悔しい気分だよ。

君、役者さんなのかな。

白石 俺は、…俺です。

黒田 そういう答えも苛つとするね。

白石 そんなことより、

黒田 そんなことより、

白石 ええ、そんなことより、本当にここから出る術は無いんですか。

黒田 …

薄々感じてはいるけど、さっきの5分間は、何の意味もないんだろうね。

君らしいよ。

白石 あなたは、本当にここから出たいと思わないんですか。

黒田 思わないよ。

白石 最初から。

黒田 …そうだね。

最初から思っていなかったかもしれない。

白石 …その物言いだと、何かしらはしたつてことですか。

黒田 いや、何もしてないね。

白石 …マダロ。

黒田 …

白石 あなたの態度ですよ。



黒田 そうの意味か。  
白石 マグロ。  
黒田 何だろ、ものすごい、屈辱的な感じがするよ。  
白石 マグロ。  
黒田 やめてくれ。  
白石 マグロ。  
黒田 やめてくれ。  
白石 マグロ。  
黒田 やめるんだ。  
白石 マグロ。  
黒田 やめる。  
白石 ∴  
黒田 何なんだ。  
こんな屈辱的な思いは久々だ。  
白石 ちゃんと、でかい声出せるじゃないですか。  
黒田 やめてくれ。  
さっきの話聞いた後だと、君に良いようにされてるみたいで、余計に腹が立つ。  
白石 ∴  
黒田 私の話を聞いてもらえるかな。  
白石 もちろんです。  
黒田 久々だよ、自分のことを話したいと思ったのは。  
白石 良いことじゃないですか。  
黒田 良いことを言うわけじゃないけどね。  
白石 構わないですよ。  
黒田 あえて言わせてもらうけど、絶対に邪魔をしないで聞いてもらえるかな。  
白石 もちろんです。  
黒田 ∴  
白石 もちろんです。  
黒田 こう見えてもね、私は一流企業に勤めていたことがあったんだよ。  
一流企業でバリバリ働いてね、若いうちに独立し、成功者として生きていたんだよ。  
時代の寵児と呼ばれたりなんかしてね。

白石、村田兆治の物真似

黒田 それは村田兆治だね。  
そうだよね。  
邪魔しないわけじゃないよね。  
思っていたより早くて、少し驚いた。  
白石 ∴ (どうぞ、続けての感じ)  
∴

怖いものなんて何もなかったよ。  
全てが自分の思うままになると思っていた。  
天狗になっていたんだろうね。

白石、何かしようとして、何もできない

黒田 思いつかないなら、じっとしていてくれないかな。  
悔しそうだね。  
：  
続けるよ。  
金で解決できないことはないと思っていた。  
最高級の食事、酒、車、女、何でも手に入ったよ。  
私の発言で右往左往する人を見るのが、快感でね。  
それが私より目上の人だったら、さらに面白かった。  
私より偉い人間なんていないと思っていた。  
私が時代を作っていけると思っていたよ。  
私より偉そうな人間には、すぐに噛みついてたよ。

白石、犬の物真似。吠える。

黒田 そうだね。噛みついてたんじゃない。  
吠えていただけだったんだ。

白石、ショックを受ける

黒田 裏目ったね。

白石 ：

黒田 私は自分が誰より偉いと思つて、何でも噛み殺せると思つていたんだが、私より大きな存在はいくらでもいたし、私は小さくて、噛みついても痛みすら感じない程度だったんだ。  
吠えてるのと一緒だよ。  
当たり前だけど、そんな私は、誰からも好かれていなかった。  
好かれていなかったというのは、聞こえがいいね。  
嫌われていたんだ。  
たくさん人間が私の周りにいたにもかかわらずね。  
ちよつとしたことが発端で、そこから、あつという間に、本当にあつという間に、全てを失つたよ。  
別に裏切られたことが悲しいとか、腹が立つとか、そういうことを言いたいんじゃないんだ。  
自業自得だからね。  
私が言いたいのは、もう何もやる気がないということだ。

全てを受け入れて、流されて生きていたいということだ。

白石 嘘だ。

黒田 嘘じゃない。

白石 プロレス体型なのに。

黒田 体型は関係ない。

白石 村田兆治は、プロレス体型じゃない。

黒田 私は村田兆治じゃない。

白石 確かに、あなたは村田兆治じゃない。

でも、そう呼ばれた時期があつたんですよ。

黒田 時代の寵児だよ。

白石 サンデー兆治。

黒田 トミージョン手術から復活した後の、村田兆治の愛称だろ。

白石 俺は認めない。

そんなプロレス体型の村田兆治なんて。

絶対に認めないからな。

黒田 何の話をしてるんだ。

邪魔しただけじゃなくて、聞いてもないのか。

白石 だったら言わせてもらいますけどね。

村田兆治は不屈の男だ。

日本球界では長年、投手の肘にメスを入れることは、タブーとされていたにも関わらず、トミージョン手術を受け、見事に復活し、球界の他の投手のみならず、多くのファンに希望を与えたんだ。

黒田 その熱弁に対して、私は何と言えはいいんだ。

白石 村田兆治を馬鹿にするな。

黒田 していない。

白石 ∴

一度とその名前を語るな。

黒田 一回も、自分が村田兆治だと語ったことはないが、わかった。

白石 ∴

一つだけわかったことがあります。

黒田 何。

白石 俺は、ここを出たいということです。

あなたは、やる気がないと言っていました。

黒田 聞いてた部分もあるんだね。

白石 俺は、やる気があります。

黒田 下ネタなのかな。

白石 やる気がある以上、ここに留まつてるわけにはいきません。

黒田 無理だよ。

白石 絶対にここから出ていってみせます。

黒田 無理だよ。

白石 無理だと思っていたら、絶対に無理ですよ。  
黒田 可能だと思っても、無理なことはあるんだよ。  
白石 やつてみなきやわからない。  
黒田 やる前から、わかっていることもあるんだ。  
悪いことは言わない。  
こういうことを言うのも、屈辱的なんだが、君として、私はそれなりに楽しいと思ってる。  
君が死ぬのは、残念だ。  
白石 俺は、生きて、ここから出ていきます。  
黒田 待ちなさい。

白石、退場

黒田 君。  
君さ。

暗転

3日目

ポップな音楽

照明、うつすらと全体を照らす

黒田、椅子の様な物に座っている

白石、床に寝ている。2日目比べて、さらに服がボロボロになっている

白石、がばつと起きる

白石 ここは。  
黒田 気付いたかい。  
白石 俺は、ここから出ようとして、  
黒田 そら。  
白石 この前と同じように、ここから出た途端、揺れが起きて、  
何か小さなものが身体中に貼りついてきて、  
黒田 オキアミだよ。  
白石 足を抑えられ、  
黒田 イカだよ。  
白石 ガツンと頭を殴られたような  
黒田 カツオだよ。  
起きたら、毎回どこかの部分を繰り返すんだね。  
白石 それから  
黒田 まだ、ふらふらになって、ここに戻ってきた。

白石

::

くそ

どうやっても、ここからは出られないのか。

黒田

::

白石

::

黒田

一度、ゆつくりしてみてもどうだろう。

白石

::

黒田

ここに来てから、君は出ていくことばかり考えてきた。  
ここらで一度、ゆつくりしてみるのも良いんじゃないかな。  
何か違う発見があるかもしれない。

白石

::

黒田

ね。

白石

あなたと同じようになれということですか。

黒田

そうじゃなくて。

少し落ち着いてみたらどうだろう。

白石

::

黒田

ね。

正直、私は、昨日も言ったように、君といて、それなりに楽しいと思ってる。  
君が出ていこうとするのは構わないが、少し寂しい気持ちもあるんだ。

白石

::

黒田

ね。

白石

::

黒田

ね。

白石

わかりましたよ。

少し、落ち着きます。

確かに昨日までは、やみくもにここから出ていこうと思っていた気がします。

落ち着いて、色々考えてみるのも良いかもしれない。

ただ、俺は絶対にここから出ていきますよ。

黒田

構わないよ。

白石

::

黒田

::

少しの間があつてから、白石、ばばやと動いてみる。

黒田

読書は苦手なタイプ。

白石

何ですか。

黒田

じつとしてるのが、苦手なんだろうね。

白石

そんなことはないですよ。

言っただけでしょう。

コンビニでエロ本、1時間読んでたつて。

黒田 言つてたね。  
白石 ええ。  
黒田 私は読書が好きでね。  
それこそ(昔は、暇さえあれば)  
白石 そんなことはどうでも良い。  
黒田 ∴  
今、そんなに怒られるようなこと、私言つたかな。  
白石 一緒に何かしませんか。  
黒田 ∴  
白石 一緒に何かしませんか。  
黒田 何故。  
白石 暇じゃないですか。  
黒田 ずっとここにいて、暇たという概念がなくなるよ。  
ずっとこうなんだから。  
白石 俺は暇なんですよ。  
黒田 そうなんだ。  
白石 何かしませんか。  
黒田 君一人でやりなよ。  
白石 何でいきなりオナニーしなきゃいけないんですか。  
黒田 誰もそんなこと言つてないでしょ。  
君の頭はどうなってるんだらうね。  
白石 聞いて良いですか。  
黒田 なんだい。  
白石 最初の日に言いましたよね。  
ここにいれば、それほど不自由な思いをせずに、生きていくことができるって。  
黒田 言つたね。  
白石 どういうことですか。  
黒田 そのままだよ。  
クジラの食事は大量だからね。  
その大量の食事の中から、私達が生きていけるだけの、配給の様なものが、私達に与えられる。  
白石 なんですか、それ。  
俺たちは、クジラに生かされてるってことですか。  
黒田 そう言えるかもね。  
白石 ∴  
黒田 不思議と、小さな欲求は叶うんだよ。  
次々と小さな欲求が叶うだけで、ある程度の幸せを感じることはできるからね。  
白石 ∴  
黒田 私は、一人になりたかつたし、何もしたくなかつた。  
幸せだよ。

シンプルで、限定された目的は、人生を単純にしてくれる。

白石　　：

黒田　　言ってること分かるかな。

白石　　わかりませんよ。

　　　　　俺は馬鹿なんだから。

黒田　　だよな。

白石　　でもね、これだけは言わせてください。

　　　　　このまま、ここにいたら、絶対につまらない人間になりますよ。

　　　　　だって、あなたつまらないよ。

黒田　　そうかもしれないね。

白石　　あなたつまらないよ。

黒田　　：

白石　　あなたつまらないよ。

黒田　　分かったから。

白石　　あなたつまらないよ。

黒田　　もう良いよ。

白石　　あなたつまらないよ。

黒田　　もう良いから。

白石　　つまらないよ。

黒田　　やめる。

白石　　：

黒田　　またマグロの方が良かった。

白石　　一緒にここから出ませんか。

黒田　　断る。

白石　　あなたは、俺を望んだんですよ。

黒田　　：どういうこと。

白石　　さっき言いましたよね。

　　　　　自分は病氣持ちだつて。

黒田　　：

　　　　　言ってるじゃないよ。

白石　　あ、違う。

　　　　　小さな欲求は叶うつて。

黒田　　全然違うじゃないか。

　　　　　君、病氣持ちなのかい。

白石　　持ってますよ。

黒田　　病氣持ちなんだろう。

　　　　　空気感染するやつかい。

白石　　持ってますんつて。

黒田　　持ってるのに、そんな言葉出てこないだろう。

　　　　　何の病氣なの。

白石 本当は持ってませんって。

黒田 良いよ。

正直に話して。

白石 本当は持ってませんから。

白石、黒田に寄る。

逃げる、黒田。

白石 何で逃げるんですか。

て言うか、動けるんですね。

黒田 こっち来るな。

白石 持ってませんから。

白石、上半身裸になって、黒田を追いかける

適当に動き回る

何故か、黒田の上半身が裸

子どものように、菌をうつし合うかのように、ぺちぺち

白石 はあ、はあ、はあ。

黒田 はあ、はあ、はあ。

白石 ほら、何かした方が楽しいじゃないですか。

黒田 本当に持ってないんだろうね。

白石 持ってませんよ。

黒田 :

白石 プロレス体型ですね。

黒田 別に良いじゃないか。

白石 小さな欲求は叶うって言いましたよね。

黒田 言ったね。

白石 だったら、俺が呑み込まれたのは、あなたが、俺の様な人間を望んだからじゃないですか。

黒田 私が君を。

白石 あなたは、心のどこかで、ここから出たいんですよ。

黒田 そんなことはない。

白石 そうなんですよ。

黒田 そんなことはない。

私はこの生活に満足している。

白石 あなたにもしたいことがあるでしょ。

黒田 言っただろ。

何もしたくないし、やる気もない。

白石 嘘だ。

黒田 嘘じゃない。



白石 嘘だ。

黒田 嘘じゃない。

白石 嘘だ。

黒田 嘘じゃない。

白石 ::

黒田 だったら聞くが、君は何がしたいんだ。

ここを出てまでしたいことが、君にはあるのか。

このクジラの中にいた方が、楽に暮らせるんだぞ。

今ここから出たところで、私たちには何がある。

何の力もない。

何もないんだよ。

そんな状態で、出てまでしたいことってのは何があるというんだ。

白石 ::

黒田 ほらみる。

言葉に詰まるだろ。

そんなもんなんだよ。

白石、わき腹辺りを叩いて、口から何か出して捨てる

黒田 ::

白石 小魚が詰まった。

黒田 ふざけるのもいい加減にしたまえ。

白石 ふざけてなんかいない。

黒田 じゃあ、言ってみろ。

何もないだろ。

何もないんだよ。

白石 簡単だよ。

黒田 何だね。

白石 セックスです。

黒田 ::

白石 俺は、セックスがしたいんですよ。

黒田 他にもやりたいことがあるだろう。

白石 いいえ。セックスだけです。

俺がここを出たい理由はただ一つ。

セックスがしたい。

黒田 ::

白石 変態的なセックスを彼女に認めさせたい。

もう一回言いますよ。

黒田 待て。

白石 いいや、言わせてもらいます。

変態的なセックスがしたい。  
黒田 ::  
白石 更にもう一回言わせてもらいます。  
黒田 もう良い、十分だ。  
白石 いいえ、もう一回です。  
変態的なセックスがしたい。  
黒田 ::  
白石 ::  
黒田 充実感たっぷりの顔だね。  
白石 ::  
黒田 なんだろう。  
全然響いてこない。  
白石 もう一回言えば良いですか。  
黒田 何度言っても一緒だと思う。  
白石 ::  
黒田 まあ、でも 私よりはマシなのかもね。  
白石 一緒にここから出しましょうよ。  
あなたの方が、このクジラについて詳しいはずです。  
一人で力を合わせれば、出られると思うんです。  
黒田 ::  
白石 外に出たら、もう用無しですけど、手伝ってくださいよ。  
黒田 さらに酷いこと言ったね。  
白石 ::

黒田、椅子の様な物に座る

白石 教祖様。  
黒田 教祖ではない。  
ここにきて、またそれやる。  
白石 ::  
黒田 私には、無理だよ。  
本当に何もしたくないんだ  
考えたくもないし、何かをする気にもなれない。  
白石 馬鹿野郎。  
黒田 ::  
白石 そんな奴の教え、誰が信じるんだ。  
黒田 だから教祖じゃないって。  
白石 俺、わかりましたよ。  
あなた、Mなんですよ。  
しかもドM。

俺が力づくで、ここから出してやりますよ。

黒田 もつと言い方があるんじゃないか。

白石 立てよ。

黒田 は。

白石 そっちじゃねえよ。

黒田 何も言っていないだろ。

白石 立てよ。

言っただろ、力づくでここから出させるって。

俺は立ってるよ。

黒田 立ってるけど。

白石 お前も立て。

黒田 :

黒田、立ち上がる

もみくちゃ

最終的に、プロレスの手四つ

黒田、力負けして、ブリッジ、ゴーン。数回

白石 勝負あつたな。

ド M、行くぞ。

黒田 :

白石 ド M。

黒田 :

白石 ド M。

白石、退場

黒田、退場しようとする。が、立ち止る

黒田 今更どうなるかっていうんだ。

ここを出たところで、今更どうなるというんだ。

黒田、戻る

黒田 だってそうじゃないか。

ここにいれば、それなりに生きていけるんだ。

それで良いじゃないか。

私には何の力もない。

力がないなら、何もしない方が良いじゃないか。

このクジラの腹の中で、黙って暮らしてれば良いじゃないか。

白石、袖から悲鳴

黒田 ほら。

::

悪いね。

私は、ここに残るよ。

暗転

音楽

音楽、カットアウト

照明、うつすらと全体を照らす

舞台上、黒田がいる

白石 駄目だった

白石、ふらふらと戻ってくる

黒田 まだ来たのかい。

もう良いよ。

二人 どうもありがとうございました。

暗転

音楽

照明、全体を照らす

礼